

「新たな都立中央図書館整備に係る有識者会議」(第1回)議事要旨

日 時：令和7年 7 月 16 日（水） 10 時 00 分～12 時 00 分

場 所：オンライン開催

出席者：吉見委員（座長）、遠藤委員、木村委員、 田中元子委員、田中里沙委員、
中井委員、中島委員、中野委員、野末委員
（欠席：朝日委員、小林委員）

議事概要

☐ 委員紹介

☐ 座長の選出

本会議の設置要綱に基づき、委員の互選により、吉見委員を座長に選出（出席委員全員一致）

☐ 事務局から、資料に基づき以下について説明

（１）会議設置の背景・目的

（２）前提条件の整理

（３）サービス内容について

☐ 意見交換（五十音順に掲載）

【遠藤新委員】

- 当地区の立地や、再開発によって他の床や建物と一体的に作れるということを生かすことで、新しい図書館ができると良い。例えば、賑やかな場所と従来の調査研究の静かな場所がうまく階層性を持ちながら、相互関係を持つような作り方ができると良いのではないかな。
- 図書館の資料は、時を超えて昔の物が今この目の前に現れて、それに触れることができるという意味でタイムレス。そうであるからこそ、時間や成長を感じられる場や体験ができると良い。
- 知りたい時に「検索」をすることは当然あってよいが、知りたい時の選択肢として Library for Creation になるといいのではないかな。何か知りたいからやったことない体験をする、手を動かす、知らない誰かに会う、そういうクリエーションが入り口になってこの図書館があると魅力的。
- 図書館は図書館といった縦割りにならないよう、図書館の管理・運営できない部分を他の機能がカバーし合えると良い。

【木村朝子委員】

- 人が行きやすく、様々な可能性を秘めている場所であると感じた。図書館の資料そのものの魅力に加え、外観や中の造り等、建物の魅力で誰もが行きたくなる“東京で一番の図書館”という冠にすることが大事。
- 「誰が何をクリエーションするか」という想定によって大きく在り方が変わってくる。想定する

ユーザーと、その人たちが何をそこで享受するのかという思想が大事。

- 資料という歴史的なものとクリエーション、真面目に取り組む方と自由に創造活動する方、といった対極的な要素を入れていくことで、より魅力的な存在になるのではないか。

【田中元子委員】

- 日本ではレガシーとして何百年、何千年も残って欲しいと思える建物が、モダンに使われる、現代に生きて使われるという事例があまり見られないが、この建物は、未永く残るものになって欲しい。
- 建物について、新築から管理修繕の情報までデジタル機能で作ることが進化している。こういった技術を生かすとハード自体が知の集積になる。ハードから、人が喜びや体感、経験などを得ることもできるので、ハード面の検討は多角的に進めると良い。
- 非常に文化発信的な立地であり、ここでクリエーションされるということが文化の集積であり、昔と今、緩いと集中など、二項対立になりがちなものをミックスさせる場所になるのではないか。
- ターゲットについて、いろいろな特性がミックスになっている現代では、「東京都の知はこうしたい」「こんな図書館はすてきだ」と作る側がリードした方がよい。
- ものづくりだけではなく、知的好奇心を喚起する瞬間そのものがクリエイティブ。知る、学ぶ、知を経験することに慣れていない人へのアプローチが大切。知る機会を多角的にもたらして欲しい。

【田中里沙委員】

- 当地区は、産業界、学术界、国内外の観光客、生活者も含め多くの人が参画しやすく、最先端が呼吸できるエリア。インプット型の図書館ではなく、考えてみたい、創りたい、という気持ちを後押ししていくことで、多様な創造性の交差点となる。創作や試行錯誤、対話といったプロセスに光が当たるような工夫ができると良い。
- クリエーションの対象はものだけではなく、自分を取り巻く都市や社会そのものにも広げることができる。子供と大人のアプローチも異なるが、互いに学び合い、刺激し合うことができる。
- 精緻に機能を詰める前に、例えば知のクリエーションや関係のクリエーション、時間のクリエーション、自己のクリエーションなど、いわゆる編集の観点も入れて整理しながら、可変性の高い建築デザインや空間、都市とつながるような開放的な構造を志向できると良いのではないか。
- 実施主体、運営の制度としては、市民参加型の制度や、共に創る共創予算など、未来世代に貢献したいという人の受け皿や、その人たちの気持ちを表現する場や装置を作っていけるとよい。

【中井孝幸委員】

- 資料を貸し出さない形で、来館者の創造的な活動にどのようにつなげていくか、類がなく恐らく

日本で初めての取組になる。

- 北欧のメイカースペースでは、常に誰かが何かを作っている。活動し続けている場所であるためには、人を置いたり、サポートしたりといったソフト面の検討も必要。
- クリエーションの意味について、ものづくりだけではなく、新しいことをやろうとしている人たちが、その資料を調べてやるということが大事。
- 資料を貸し出さない都立図書館では、本かずっとそこにある、置かれたままであることが大きな魅力。例えばテーマ配架のようなものなど、クリエイションをメインに取組を考えていけるとよい。
- 石川県立図書館ではこどもコーナーにネット遊具が設けられ、今まで図書館に来なかった人たちが来た。少し賑やかすぎるという声もあるようだが、居場所づくりは重要。

【中島さち子委員】

- 図書館における学び方は多様になっている。いろんな人たちが多様に学べて、同時に共存できるという、包摂的な遊び場・学び場を作っていくことが重要。「開かれている感じ」「迎えられている感覚」を持たれる仕掛けが大事で、屋外とのシームレスな場も必要と考える。
- 「静かに心を落ち着けて過ごせる場」「何かものづくりをするような場」「外も含めてシームレスに見えるような形で開かれた半屋外的な空間」の3つ空間が必要で、ヘルシンキの図書館では、これらから分断されず、グラデーションの中で分かれている。
- 子供の頃は砂をつかむなど手を使っていたことが、大人になるに連れ減ってくる。五感を喚起したり、体を動かしたりすることは大切。日本ではあまりファブラボがうまくいっていないが、学生や、作ることが好きな人がいて付き添ったり、遊び場になっていることが必要。
- 多様な人と出会う場も意外に少ない。様々な人とのごちゃ混ぜの出会いを創出するような場をうまく作れると面白い。
- 人だけではなく、ものやテクノロジーに関してもある種「出会いの格差」がある。ここに来たら面白い本に出会った、面白い道具に出会ったなど、いろいろな出会いを創出する開かれた場が、公的な場としてあるべき。

【中野泰志委員】

- 当地区の将来像「誰もが集い・つながる、開かれた『智の創造拠点』」を踏まえ、ダイバーシティやエクイティ、インクルージョンということは、ぜひ考えていただきたい。ハードを考える時は、当事者参加で、議論をするようなプロセスがあるとよい。
- こどもの城は障害のある子供たちが使えるおもちゃが展示してあって、様々なワークショップも行われていた。その地であることも大切にしたい。
- ダイバーシティの観点から、ぜひ“りんごの棚”を常設して欲しい。例えば触る絵本が何のために

あるのかとか、障害のある方がどのように本を読んでいるのかなどを考えるきっかけになる。

- 賑わい交流の場では、例えば視覚障害者が普段触れることができないウィルスの形を3Dプリンターで拡大して触ったり、象を小さくして触ったりできるというような、単に何か作るだけではなく、作ったものを障害を抱える方と共有するというような場になると面白い交流ができるのではないかな。
- アーカイブについて、国立国会図書館との連携等、アクセシビリティを考えてほしい。

【野末俊比古委員】

- 現在の中央図書館が果たしている役割、とりわけ都道府県図書館としての役割は維持あるいは拡充したうえで、これまでの有識者会議などが提示している機能を付加して、図書館を発展させていく、という点は前提として確認しておきたい。中央図書館が実践しているサービスや図書館協議会の提言なども踏まえて、今後の議論を行う必要がある。
- ファブラボやメイカースペースなどについては、図書館の資料や図書館員などの「図書館が持っているもの」を活かしているところがうまくいっている。「図書館だからできること」を中核として、他の機能を組み合わせていくことは外してはならないポイント。これまで図書館を使っていない利用者層にも図書館を使ってもらえるようにしたい。
- 人間は多様性を持った存在であることから、様々な使い方ができることが大事。例えば「児童室」「展示室」などと分けるのではなく、融合的・流動的に使えるづくりが求められる
- 多摩地域や島しょ在住も含めた都民や、都外からの通勤者、ツーリストやリモートワーカーなど、多様な利用者を見据えていくことが重要。そのためにはDXは必須である。テクノロジーでできることはテクノロジーに任せて、人間にしかできないことにリソースを割くことが望ましい。
- 図書館が図書館であるゆえんのひとつがコンテンツ。図書・雑誌などだけでなく、利用者が作り出した学びの成果あるいは経過をコンテンツとして集積し、それを他の利用者が見たり使ったりして新たな学びを起こす。人が学んだ過程や結果が蓄積されることで、時空を超えて他の人が学んでいくことができる。
- これからの図書館の運営を図書館員だけが担うのは限界がある。立地の特性も活かして、人や学校、企業などとの連携・協力を含めて、協働的な運営を行うことが望ましい。相乗効果を発揮していけるとよい。

【吉見俊哉座長】

- 対象地は、表は青山通りの顔がある一方で、横や裏の方の顔はキャットストリート・表参道等と相当なポテンシャルを持つ地域。また、敷地内には大名屋敷の遺構である琵琶池が残っており、これをどうするかも重要なテーマである。
- 日本で、クリエイティブな機能がクリエイティブとならないのは、結果を求めすぎるからであ

る。重要なのはプロセスであり、そのためのクリエイティブな時間、クリエイティブな空間、クリエイティブな関係とは何か、それを図書館がどうサポートするのかを打ち出していく。

- 工作室とか音楽室とか、機能をはっきりするとよくない。知のクリエーション、関係のクリエーション、時間のクリエーションなど、戦略的に崩していくことが重要。
- 石川県立図書館では、司書が自分たちの棚を作り、本の配列も決めている。ライブラリアンが一番いきいきする図書館とはどういったものかという視点も重要。
- 石川県立図書館は、子供の賑やかな遊びから、書棚空間の一番上層部分は専門書が並ぶなど、階層化がよく考えられている。
- 周辺地域とのコラボについて、民間のものが集積するこの地域は特に可能性がある。そうしたものの連携により、いわば“図書館が周辺地域に染み出していくような場”があり得るのではないか。
- 図書館という定義ではないが、グラングリーン大阪は、巨大な空白をすることによって、クリエイティブな空間を創ったという素晴らしい事例。必ずしも足し算していくことだけがクリエーションではない。